

研究の広場：草野柴二訳『モリエール全集』について

富田高嗣

1 はじめに

モリエールが日本に紹介されたのは明治期であり、フランス文学の作家の中でもかなり早い。翻訳として記録上最も古いものは、明治19年(1886)年に出版された『南北梅枝態』といわれるが、これは *L'École des femmes* である。これ以降現在に至るまで様々な翻訳が出版されてきたが、「全集」という名を冠しているものには以下のものがある⁽¹⁾。

- (1) 草野柴二訳『モリエール全集』金尾文淵堂、明治41(1908)年
- (2) 坪内士行訳『モリエール全集』天佑社、大正9(1920)年
- (3) 吉江喬松ほか訳『モリエール全集』中央公論社、昭和9(1934)年
- (4) 鈴木力衛訳『モリエール全集』中央公論社、昭和48(1973)年
- (5) 廣田昌義、秋山伸子訳『モリエール全集』臨川書店、平成12(2000)年

これらのうち、モリエールの全戯曲の翻訳を収録しているのは(3)と(5)でのみあるとはいえ、「全集」と称する書籍が5種類あるのは、モリエール好きの人間にしてみれば大変にありがたい⁽²⁾。これ以外にも「選集」「傑作集」「名作集」「笑劇集」などといったような形で出版されているし、かつて隆盛を誇った世界文学全集のような企画がある場合には必ずといってよいほどモリエールの作品が収録されており、また単独の作品の翻訳も多い。それだけモリエールが日本において十二分に受容され、また膾炙していることの証左であろう。

ただ、モリエールの翻訳はその時代によってさまざまな役割を持っていたこともよく論じられる。例えば、初期の翻訳の場合、演劇改良運動の中でモリエールの作品が紹介されていたし、また戦後になってからは俳優座などいわゆる新劇団の隆盛とともにモリエールの翻訳が行われてきた。演劇の動き以外でも、フランス文学作品の翻訳が多く出版されていた時代において、モリエールは他の作家同様に様々な形で紹介されてきた。

モリエール生誕400年という記念すべき年にあって、「日本におけるモリエールの受容」といったテーマで様々な論考や発表が碩学よりなされることが予想されるので、全体的な受容についてはそちらにお任せするとして、ここでは最も古い「全集」である草野柴二による『モリエール全集』に焦点を当て、どのようなものであるのかを紹介してみることにする。

2 訳者草野柴二について

まず、訳者である草野柴二についてまとめてみる⁽³⁾。

明治8(1875)年11月15日に岡山県北和気郡(現在の久米郡)に生まれ、本名は若杉三郎。東京帝国大学英文科で学び、卒業後は北越地方で中学の英語講師を務めていた。明治40年から東京の私大で時間講師の職についており、明治43年からは熊谷中学の英語講師となる。大学在学中から様々な翻訳を出版しているが、英米文学作品はむしろ少なく、もちろん英語からの重訳であると思われるが、ゲーテ、チェーホフ、ツルゲーネフ、トルストイ、イブセン、モーパッサンなどの作品を翻訳している。なかでも、モリエール作品の翻訳は多く、全部で16の戯曲を翻案あるいは翻訳という形で出版している。自身による創作活動も行っており、約20編の小説を発表している。

モリエールに関連するもので最初に世に出たのは、*La Jalousie de Barbouillé*を翻案した『艶舌魔』であるが、これは文芸誌「明星」の明治37年6月に掲載された。与謝野鉄幹が主宰するこの雑誌は詩歌を中心に掲載していたが、同時に西洋文学の紹介も行っていた。7月から11月までは*Sganarelle*の翻案である『倉吉』、12月から翌明治38年5月まで*Le Misanthrope*を翻訳した『健闘家』を連載している。これ以降も様々な作品の翻案あるいは翻訳を文芸誌に発表を続けていたが、これ以外にも演劇関連の雑誌「歌舞伎」でもいくつかの作品を発表している。この雑誌は森鷗外の第三木竹二が編集に携わっていたもので、歌舞伎の紹介や劇評等を掲載していたが、「明星」と同様に西洋の作品の紹介も積極的に行っていた。こちらの雑誌で草野は『染直大名稿』*Le Bourgeois gentilhomme*、『恋医者』*L'Amour médecin*、『守銭奴』*L'Avare*などを発表している。

「明星」とは異なり、「歌舞伎」の方では、草野は上演を意識し翻案あるいは翻訳を発表しているようで、表題にも「脚本」とついているものがある。ところが、実際に上演されたと考えられるのは、*L'Amour médecin*の翻案である『結婚療法』のみといわれている。明治41年4月に明治座にて上演された記録がある。演出は小山内薫、主演は市川左団次(初代)であった。左団次は2年前に行った襲名披露興行を成功させた時の金を使って、明治40年にヨーロッパやアメリカの演劇を視察し、明治41年にはその視察の影響から、海外の作品を明治座にて上演をしている。『結婚療法』の上演もその流れで行われたものだった。上演時には、コメディ・フランセーズの真似をして、幕開けの前に舞台の床を三回叩いたといわれている⁽⁴⁾。

草野は1912(明治45)年に没するが、日本における西洋文学・演劇の導入期にあってモリエールの翻訳を積極的に行い、さらには「全集」という形でモリエールの作品を紹介し、後述するようにモリエールとはどういう人物であるのか、どのような作品を作り出した人物であるのかを紹介してきたという点でもっと評価されてもよいのではないかと思う。

3 『モリエール全集』の概要

この全集が出版されたのは明治41年のことであるが、その際には上巻・中巻・下巻の3巻本だった。しかし、のちにこれを1冊にまとめたものが出版される⁽⁵⁾。出版したのは金尾文淵堂という大阪の会社である。もともとは仏教書の出版をおこなっていたが、きれいな装丁を施した文芸書の出

版で名をはせた⁽⁶⁾。実際、この全集の装丁は橋口五葉の手による。橋口五葉は、本の装丁や版画で有名であり、美人画を多く残しているためか「大正の歌麿」と呼ばれていた。彼の装丁で現在でも有名なのは夏目漱石の『吾輩は猫である』の表紙であろう。『モリエール全集』と表記されるが、これは表紙だけのことで、本文中では原則として「モリエール」となっている。あくまでも装丁の問題として「モリエール」となっているのではないと思われる。

収録している作品（詳細は後述）のひとつひとつにその戯曲の一場面を描いた挿絵が付いているが、すべて別の作家の手によるものであり、かつまたその作者たちも当代の有名な洋画家や版画家であったようだ。詳述は避けるが、作者の多くは東京美術学校（現東京芸術大学）の関係者で、黒田清輝の弟子であると思われる人物が名を連ねている。

さらに、巻頭にはモリエールの肖像が掲載されているが、書斎のようなところで左手を顎に軽く当てている非常に有名な肖像画を模して書かれているものである。これは当時東京美術学校の教授を勤めていた洋画家のひとりである長原止水の手になるものである。

では内容を紹介していこう。

(1) 序文

まず「序文」において、草野柴二がなぜこの全集を編むに至ったのかが詳述されている。大学生の頃、芝居を好み、なかでも特に喜劇に執心であったこと、そして大学の授業の中でモリエールの作品に出会い、日本に紹介することには大きな意味があると考えたことが綴られている。さらには、誰もこれを企画しなかったために自分自身が非力ではありながらも、嚆矢とならんと考えたとも書かれている。

この全集は、英訳されたモリエールのテキストを利用した重訳であるが、「序文」で自身も述べているように、フランス語のテキストに触れていたことがわかる。

初めてモリエールを知ったのは（モリエールの名を知ったのではない）去る三十六年、大学でフローレンツ博士の仏蘭西文学史を聴いた時だ。此作家略伝と一二の作物の梗概を伝えられた時は、奇しきまで此作家が懐かしくて是非その喜劇を読みたいと思つた。一円を出してモリエール傑作集の汚ない本を二冊買つてきた。同じく大学で厳格なる一今より考ふれば一種の愛嬌ある一エック先生に悩まされたけれど、仏蘭西語では駄目だ、仏蘭西語のモリエールを鑑賞することは到底力が及ばぬ。又五円何がしか出してモリエール全集の英訳本を買つてきた。英訳本なら読める。原文のモリエールと是れと対照して見れば文章の同異は解る、意味も大概解る。但し、鑑賞することは依然として出来ぬ⁽⁷⁾。

ここに登場する「エック先生」とは、当時東京帝国大学でフランス語の教鞭をとられていたエミール・エックのことであろう。エックは、カトリックのマリア会の修道士であるが、1891（明治24）年に東京帝国大学に赴任し、揺籃期の仏文科を牽引していた人物である。のちに、マリア会の経営

する暁星学校（現在の暁星学園）の校長に就任するため東京帝国大学を去る。ちなみに、当時の暁星学校で使用されていた選文集では、古今の著名な作家のテキストが収録されており、モリエールのテキストの抜粋も含まれていることから、この時代にあってかなり水準の高い仏文学教育がなされていたと推察される。

また本題とはそれるが、フランス文学史の授業を担当していたと草野が言っている「フローレンツ先生」とは、おそらく当時東京帝国大学でドイツ語やドイツ文学を講じていたカール・フローレンツのことと思われる。フローレンツは1889（明治22）年から1917（大正3）年まで教鞭をとっていたようだが、おそらくこの頃仏文科の教員はまだ数が少なく、フローレンツがフランス文学を講じていたのだろう。

(2) 例言

次に「例言」であるが、これは字義通り、過去の出版した翻訳の編集者に対しこの全集に再掲を許可してくれたこと、また装丁や挿絵を書いてくれた人々へのお礼が述べられている。また、自分よりも前にモリエールの翻訳に携わった人たちへの敬意も述べられている。

(3) モリエール紹介

その次に書かれている「モリエール紹介」は、モリエールの略伝といったところであり、あわせて作品の紹介がなされる。そのうえ必要に応じて、17世紀当時のフランスにおける演劇状況についても書かれている。この部分を執筆するにあたり、草野は「序文」の中で以下のように述べている。

ミス・オリファントの『モリエール』を原として側ら、チャトフィールド・テラアの『モリエール伝』、ダウデンの仏蘭西文学史、大英百科全書及び、フローレンツ博士の仏蘭西文学史講義に頼つて草した⁽⁸⁾。

この「紹介」はかなり詳しく書かれており、125ページに及ぶ。これは全体のおよそ10%にあたる分量である。草野が参照しているモリエールについて書かれた文献は、Margaret OLIPHANT, *Molière* と Hobert CHATFIELD-TAYLOR, *Molière A Biography* であると思われるが、それぞれ1896年、1906年に出版されているので、草野にとっては新しい文献であったのだろう。残念ながら筆者はこれらの文献を実際に見たわけではないが、いずれの著者も当時は高名であったと思われ、当時としてはかなり信用のおけるものであったと考えられる。

「紹介」の内容についてだが、章ごとにタイトルがついているので、これを列挙しておくこととしよう。

- ① その幼期
- ② 当時の仏蘭西劇

- ③ 若きモリエール
- ④ 前期の二三作
- ⑤ モリエールの壮年時代
- ⑥ 作家とルイ十四世
- ⑦ モリエールの隆盛時代
- ⑧ モリエールの臨終

まさしく略伝であり、モリエールがどのように生きてきたのかについて非常に詳しく書かれている。また、時代ごとにモリエールの作品の簡単なあらすじが書かれ、それぞれの作品がどのような評価を得ているのかなども紹介されている。その内容については、多少の誤解などはあるものの、現在理解されているものとそれほど大きくは変わらない。

④ 翻訳および翻案

この全集に収録されている 15 作品である。以下は原タイトルと翻案あるいは翻訳の名称の一覧である。あわせて、前述の挿絵の作者の名前も付しておく。

原タイトル	翻案・翻訳名	挿絵の作者
<i>La Jalousie de Barbouillé</i>	艶舌魔	北蓮蔵
<i>Sganarelle</i>	倉吉	岡野栄
<i>L'École des maris</i>	良人学校	石井柏亭
<i>L'École des femmes</i>	夫人学校	高村真夫
<i>La Critique de l'École des femmes</i>	夫人学校是非	村上天流
<i>L'Impromptu de Versailles</i>	稽古芝居	町田曲江
<i>Le Mariage forcé</i>	押付女房	橋本邦助
<i>Le Tartuffe</i>	偽善者	庄野宗之助
<i>L'Amour médecin</i>	恋の医者	赤松麟作
<i>Le Médecin malgré lui</i>	押付医者	中澤弘光
<i>George Dandin</i>	姦婦の夫	小林鐘吉
<i>L'Avare</i>	守銭奴	石川寅治
<i>Le Bourgeois gentilhomme</i>	染直大名縞	小林萬吾
<i>Les Fourberies de Scapin</i>	瞞着男	小杉未醒
<i>Le Malade imaginaire</i>	脳病秘薬	満谷國四郎

これらのうち、*La Jalousie de Barbouillé* 『艶舌魔』、*Sganarelle* 『倉吉』、*L'Amour médecin* 『恋の医者』、*Le Bourgeois gentilhomme* 『染直大名縞』、*Le Malade imaginaire* 『脳病秘薬』の 5 作品は「翻案」

となっている（「翻訳」か「翻案」かというテーマについては後述する）。これは単なる偶然であるのかもしれないが、上記の作品のうちほとんどがのちに何度も翻訳がされ、文庫本として流布されるにいたる。草野自身が内容的に日本人に理解してもらいやすい作品を選んでいるとも考えられるが、前述のように *Le Misanthrope* も翻訳しているが、ここには収録していないものもあり、実際どのような判断によるものであるのか不明である。

4 「翻訳」か「翻案」か

この全集に収録されている作品の登場人物は、すべて日本人の名前に変更されている。したがって、すべてが「翻案」と呼ぶべきものであるかもしれないが、草野自身はあえて、「翻訳」と「翻案」と区別をしている。この違いについて推察するとすれば、「翻訳」の方は原作の戯曲の構成を比較的保っているのに対し、「翻案」の方はそうではない。「幕」や「場」の構成を自分の意のままに変更してしまっている。

では、具体例をみとめることにしよう。

(1) 『偽善者』 *Le Tartuffe*

まず、「翻訳」の一例として『偽善者』 *Le Tartuffe* を取り上げる。登場人物は前述のとおりすべて日本人の名前になっている。以下の登場人物の表を掲げ、その人物たちが原作の度の人物に対応するのかを示す⁽⁹⁾。

有賀新兵衛	主人、ゑみの夫、照明を迷信す	⇒ オルゴン
有賀新之助	新兵衛息、照明を嫌忌す	⇒ ダミス
勝見礼三郎	新兵衛娘鎮枝の情人	⇒ ヴァレール
加藤哲雄	ゑみの兄、新兵衛義弟	⇒ クレアント
鳴神照明	偽善者、破戒僧	⇒ タルチュフ
ゑみ	新兵衛妻	⇒ エルミール
みね	新兵衛母、照明を迷信す	⇒ ペルネル夫人
鎮枝	新兵衛娘、礼三郎の許嫁	⇒ マリアーヌ
ちよ	鎮枝の侍女、照明を嫌忌す	⇒ ドリーヌ
ふみ	老母付の婢	⇒ フリボット

この表を見てわかるのは、まず男性から書かれており、女性はそのあとになっている点である。これは当時の脚本の慣習にならったものであろう。

登場人物の名前が日本人の名前になっているのは、当時として普通のことであり、特に珍しいことではない。登場人物の名前の中でも、タルチュフが「鳴神照明」となっているのは秀逸である。もちろんこれは歌舞伎十八番の内『鳴神』の主人公鳴神上人に由来するものであろうが、女の色香

に迷う上人の類推から、当時の読者や観客はタルチュフがいかなる人物であるのかを容易に理解することができただろう。

しかし、舞台は日本ではなく「場面 巴理」とある⁽¹⁰⁾。登場人物は日本名であるのに、舞台はパリで展開される矛盾を当時の読者はどのように感じたのか詳らかではないが、このことから西洋の息吹のようなものを感じ取っていたのではないかと推察する。事実、*Le Tartuffe* の最後の場面でタルチュフは国王の命で逮捕され大団円を迎えるが、この翻訳においても、逮捕を命じるのは「国王」となっているし、そこへあらわれる警吏も「生国は那満泥（ノルマンディ）」と試みて⁽¹¹⁾、有賀新兵衛（オルゴン）の危難に際し勝見礼三郎（ヴァレール）が持参するのは「千ルイ」のお金であったりする⁽¹²⁾。

次に全体の構成についてみてみると、基本的には原作の構成を保っているといえる。しかしながら、第1幕を例にとってみると、第1場、第2場はそのままであるが、第3場と第4場はひとつにまとめられており、また台詞も一部割愛されている。だが、原作の持つ話の流れを阻害しているわけではなく、この点では原作に忠実であるといえよう。

では、実際にどのような訳文となっているのか、第1幕のオルゴンとドリーヌのやり取りを翻訳した部分をご覧ください。

其五 主人新兵衛、義弟哲雄、婢ちよ。

新兵衛 やあ、久瀧でしたな。

哲雄 や、今お暇するところでした。お目に掛けて丁度好都合でした。如何です田舎はまだ花盛りにならんでしょう。

新兵衛 一寸失礼します、留守中の様子を聞かんうちは何だか気が休まらんで。（ちよに向ひ）この二日間変りはなかったか、何かあったか、衆何とも無かったか。

ちよ あの、奥様が一昨々朝から大変なお熱でございまして、これにお頭痛で御難儀をなさいました。

新兵衛 で、鳴神さんは。

ちよ 鳴神さんですか、彼方は大御丈夫、がっしりお肥りでお色沢のおよろしいたらございません。

新兵衛 そうか、よかった、よかった。

ちよ 奥様はもう晩にはぐったり遊ばして、何ひとつ召上ることも出来ないほどのお頭痛でございました。

新兵衛 で、鳴神さんは。

ちよ 鳴神さんは奥様の前で一人で召上りました、鷓鴣を二尾と羊の切肉を片足と、沢山に召上りました。

新兵衛 そうか、よかった、よかった。

ちよ 奥様は終宵微睡ともなさがることが出来ませんで、それに酷いお熱でしたので、私どもも朝

までお付き申していなけありませんでした。

新兵衛 で、鳴神さんは？

ちよ 気持ちよく酷く睡気がさしていらして、御膳のとおからお部屋へ被行いまして、そして直ぐ暖かなお床へお入りになりまして、翌朝までぐっすり寝込んでおしまいでした。

新兵衛 そうか、よかった、よかった。

ちよ で、とうとう衆の勧めお聴きいれ遊ばして、血をお取りになりましたら、ずっとお軽くおんななさいました。

新兵衛 で、鳴神さんは。

ちよ 元気をお出しになって、悪魔除けの為に、奥様の血を取ったから、それを補うのだから、大きなお杯で葡萄酒を四杯も召上りました。

新兵衛 そうか、よかった、よかった。

ちよ そう致しましてお二人ながら只今は御丈夫なのでございますわ。どれ、奥様のとことへ参って旦那様が、奥様の前回は喜んでおいで遊ばすことをお知らせ申しましょう⁽¹³⁾。

この部分を一読していただけるだけで、この時代にしてはかなりの精度で訳がなされていることがおわかりいただけるだろう。このあとに紹介する「翻案」とは異なり、あくまでも「翻訳」としてできる限り原文に忠実に訳すことを心掛けていることがうかがえる。英語からの重訳であるとはいえ、このような形で「翻訳」を提供できていることに、先達の苦心とそのレベルの高さを十分に感じるができるだろう。

(2) 『艶舌魔』 *La Jalousie de Barboillé*

次に、「翻案」の一例として『艶舌魔』 *La Jalousie de Barboillé* をみてみよう。

La Jalousie de Barboillé は現在では『ル・バルブイエの嫉妬』と訳されることが多いが、そのタイトルどおり、主人公のル・バルブイエが夜ごと遊び歩く妻のアンジェリックに嫉妬するが、最後は自分自身がやりこめられてしまう内容である。見せ場としては、ル・バルブイエと博士の場面、締めだれたアンジェリックが扉を開けさせようとする場面がある。困ったル・バルブイエが博士に相談をするが、博士はわけのわからないことばかりをしゃべるので、まったく役に立たない。これはいかにもイタリア風笑劇のやり取りで、まさしく「見せ場」のひとつといえよう。原作では「一二三四五六七八九十倍も博士なのだ」という博士の台詞があるが、まったく同じ台詞を草野は使っている⁽¹⁴⁾。次にアンジェリックの計略の場面であるが、原作ではナイフを使って自分を指すふりをするが、『艶舌魔』では簪を使うものの、同じような場面となっている。

このように原作の様々な場面や台詞がそのまま用いられているが、この翻案では登場人物が大きくカットされ実際には3名の登場人物しかいない。登場するのは大工常吉（ル・バルブイエ）、お春（アンジェリック）、占者闇斎（博士）だけで、原作に登場するアンジェリックの情婦や父親、ル・バルブイエ家の女中は登場しない。

また、原作では全部で13場からなるが、『艶舌魔』では「上」「下」となっているだけである。「上」では常吉が闇齋に相談をする場面、「下」ではお春と常吉とのやり取りの場面に集約されている。

では、『艶舌魔』の最初の場面をみてみることにしよう。

(煙草を吸ひながら考へてゐる) 己ぐれえ不合せの者は世の中に在れあしねえ。春の阿魔にも困つたものだ、家内のことも小児の世話も放棄で、間がな隙がな常盤座を覗いてゐやがる。己が一日汗水たらして、五貫か七貫か取つてくるのを、三文も残さず浚ひあげて、それで鯛一匹豆腐一丁買つて置くちあねえ。うぬ計り夜更しした帰りに稲荷鮓をばくついてゐやがるんだもの、己だつてたまには矢大臣をきめたくならあ、面白くもなえ。今朝も今朝だ、晩くなつちあ親方の受けが好くねえから早く弁当を拵へて呉んねえ、稼ぎ人の女房が鋳掛屋が通る迄寝てることもあるめえつてつたら、夜深しをすれば朝寝は当り前だつて一言ひ草が癩に障らあ。其癖此の日の短けえのに二時間餘りの昼寝をして、此内職ぢあ晩の菜も買へねえもよく出来てらあ。晩のお菜を買ふ風けえ、小児をだしに八百屋の小僧を戯弄つたり、飴屋を呼んで買食いばかりしている癖に。其上にまだ近所の山の神を集めて、無けなしの札片をきつて女だてらに小皿をやるんだ⁽¹⁵⁾。

これは原作と比較すると非常に長い。この独白は全体の半分ほどであるが、原作では上記の部分と同じくらいの分量しかない。したがって、ル・バルブイエの愚痴もここまで具体的ではない。単に、妻が夜遊びして、情婦がいるのではないかと疑っているだけである。しかし、常吉の苦悩が非常に詳しく説明されている。妻としての役割を果たしていないという愚痴にまとめることができるかと思うが、特に子供の世話をしないという悩みが出てくるあたり、常吉の愚痴は切実なものであり、また当時としてみれば当たり前のものであるように受け取れる。さらに、常吉がこのような妻を離縁しないのには、以下のような理由がある。

離縁するのが俺は恐怖くねえ、未練があつてださねえんぢやねえが、小児の世話にこまらあ、世間体があらあ⁽¹⁶⁾。

「世間体」という言葉が、常吉の行動をさらに正当化しているといえよう。

このあと、原作ではたまたま通りがかつた博士に相談をしてみるのだが、『艶舌魔』では近所に住んでいる占者闇齋に相談をするよう変更されている。これは後述するが、「下」の中で常吉とお春のやり取りに闇齋が登場するための工夫である。ちなみに、相談に行こうとする常吉は、家を出る前に寝ている子供の顔を見て、ため息をつく、というト書きがある。いかにも世話物狂言の主人公の体で設定され、演技の指示がなされている点には着目しておいてもよいだろう。

闇齋の役割は、原作の博士と基本的には一緒で、よくわからないことを話し出し、常吉を困らせてしまう。また原作の最後の方で、ル・バルブイエが博士に話をしようとするものの、邪魔をしてしまう場面があるが、これは『艶舌魔』でも同じような場面が取り入れられている。

しかし、ひとつ大きな違いがある。それはお春を懲らしめるために閉め出してしまうアイデアを出すのは闇齋である。原作では、たまたまアンジェリックよりも先に帰宅したル・バルブイエが戸締りをし、アンジェリックが家に入れないという設定になっている。つまり、単なる放言をしている博士とは異なり、実際に役に立つ助言をしている。

なぜ、このような設定になっているのだろうか。それは闇齋が単なる偏屈な学者として描かれるのではなく、最後の最後で彼自身もお春に辟易としてしまう人物として描かれる必要があるからではないだろうか。原作では、最後にアンジェリックの父親が現れ、そのとりなしのせいで、ル・バルブイエは妻の罪を糾弾することができず、泣き寝入りをせざるを得ないように描かれているが、『艶舌魔』ではその父親が登場しない。むしろ、お春の弁舌にはあまりにも勢いがあり、その口説に常吉は妻を懲らしめられずにいるが、お春なりの「世間体」を繕うために、自分は決して悪くないのだという弁明を闇齋相手に言い、最終的にこのような女性では致し方ない、といった終わり方をしている。つまり、闇齋が、いわゆる博士のような人物造形ではその効果が薄れてしまうので、原作と比較した場合、多少は常識的な部分を有した人物として描こうとしているのが草野の狙いではないかと思われる。

もちろん、原作に登場する博士は、イタリア風笑劇の典型的な人物であり、その荒唐無稽さによって笑いを誘うことが17世紀のフランスでは一般的だったという状況が、明治時代の日本にはないという背景を理解しておくことも必要だろう。

最後にお春の長広舌をご覧くださいとしよう。

まあ！ おほほほ。……いいえね。此の、常さんが帰つて参りましたから、戸を開けに出やうとして致したのでございますよ、灯火を持つて一上り口が暗いと何だと存じましてねえ、ひょいとわたしが灯火を持ちやげたものでございますから貴公消えて了つたぢやございまんか、いいえわたしの粗相でございますもの。それで常さんは此通り御酒を戴いて…いいえ、何ほんの少しでございます。此度親方のうちで飲んだのでございませうけれど、一体ごく無丁法な方でございますから何時でも二猪口か三猪口戴きますと直ぐ足がねえ貴郎躡ひょうひょうするのださうで。それでございますから只今も雨戸につい倒れ掛つたものと存じま、それを貴君には何か常さんが酔つぱらつて乱暴するのだと思し召してわざわざ起きていらつして下さいまして、ほんとにお気の毒な、……いいえ常さんは決してお酒の酔つてどうかうする人ぢやございませぬ、唯もう心持よく就寝やすむばかりでございますから、わたしもこんな仕合せなことは無い、ほんとにわたしは好い人に伴れ添って…あら、御免なさいまし変なことを申しまして、おほほほほ。さあ貴君、どうかもうお休みあそばして下さいまし、ほんとに飛んだお世話様に…何れ明日ゆつくりお礼にあがります、さよなら。

(常吉、狐が離れたようにほんやりとなり、さすがの哲学ト壺家闇齋ぐうの音もなく、自分自分のうちにめいめい入る) (完)⁽¹⁷⁾

表題の『艶舌魔』とは、まさしくお春のことである。つまり、原作では主人公ル・バルブイエの

嫉妬とその悲しい結末が描かれる、つまりその主題は浮気な妻を持った男の不幸ということになるが、『艶舌魔』では同じ主題でありながらも、妻お春の長広舌に焦点が当てている点、やはり「翻案」と称すべきなのではないかと草野は考えたのだろう。

5 まとめ

草野柴二版の『モリエール全集』の紹介を駆け足で行ってきたが、正直なところ他の作品の分析も含め、実際にどのような変更、割愛、工夫がなされているのかを検討してみたいと思っている。明治期の翻訳や翻案については、フランス文学・演劇の専門家の方ではなく、日本文学・演劇の専門家の方による研究が多い。しかしながら、分野横断的研究が推進される昨今の状況にあって、いわゆる「異文化交流」によりそれぞれの研究を深めることに役立つのではないかと思料するが、本当にその効果が見込めるのか否かよくわからない横断的研究よりは、共通の目的も明確であるこの領域の研究の推進にはより大きな意味があるのではないだろうか。日本でのモリエールの受容を生誕400年という記念すべきこの年に今一度考える場合、先達の労作に目を向け、可能であればその功績を再評価する機会があってもよいと思う。

注

- (1) 鈴木力衛訳『モリエール全集』第4巻所収の金川光夫「日本におけるモリエール」を参照のこと。また、本稿の作成にあたりこの論考に多くを負っていることをここに謝辞とともに付言しておく。
- (2) 厳密には(1)と同じ訳者による『モリエール全集』の記録がある。ただし、出版年を含め、不明な点も多く、ここでは数に入れなかった。また、大正5(1916)年にも同じ出版社から発刊されたが、こちらはすぐに発禁となっているようである(前掲「日本におけるモリエール」を参照のこと)。
- (3) 草野柴二については、以下のものを参照した。
廣田昌義、秋山伸子訳『モリエール全集』臨川書店、第10巻、182～212ページ。
『続・明治翻訳文学全集』翻訳家編第19巻「草野柴二・押川春浪集」、大空社2002年
『20世紀日本人名事典』、日外アソシエーツ、2004年
- (4) 大笹吉雄『日本現代劇史 明治・大正篇』、白水社、1985年、98～99ページ。
- (5) 筆者の手元には3巻本のうち上巻と中巻、1冊にまとまった版があり、執筆に際しこれらを参照した。現物の入手は現在困難と思われるので、国立国会図書館のホームページで閲覧をするか(<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/10298113>)、前述の『続・明治翻訳文学全集』翻訳家編第19巻「草野柴二・押川春浪集」を参照していただきたい。『全集』の序文と翻案『艶舌魔』が収録されている。

- (6) 石塚純一『金尾文淵堂をめぐる人びと』新宿書房、2005年を参照のこと。
- (7) 草野柴二『モリエール全集』、3ページ。
- (8) 同上、8ページ。
- (9) 同上、489ページ。
- (10) 同上、490ページ。
- (11) 同上、588ページ。
- (12) 同上、593ページ。
- (13) 同上、501～503ページ。
- (14) 同上、130ページ。
- (15) 同上、127～128ページ。
- (16) 同上、128ページ。
- (17) 同上、144～145ページ。